



「やまなし歴史の道」とは

人は、古くから道を利用してきました。道は、集落と集落、国と国、地方と中央とを結び、人々の交流の基点、物資の流通の基盤としてなくてはならないものです。道を通じて交わってきたものが、お互いを刺激し、生活、文化、そして歴史を形成してきました。しかし、時代の変化と共に道の役割は変わってきます。人々の営みが形作った「もの」や「こと」は、継承されたものもあれば、忘れ去られたこともあるでしょう。

歴史上様々な役割を果たしてきた道について、文化庁は1978年に「道、水路は、古くから文物や人々の交流の舞台となり、我が国の歴史を理解する上で極めて大切な意味を持つ物であり、最も身近な文化財の一つ」だと意義付けました。これが「歴史の道」の根幹をなす概念です。そして、江戸時代以前の古い道・運河等とそれに沿う地域の文化遺産を周囲の環境を含めて総合的・体系的に調査すると共に、それらの保存整備に着手します。さらに1993年になると「地域の文化財にふれる事業(歩き・み・ふれる歴史の道事業)」に取り組み、地域の歴史文化への理解の一助とすると共に、地域の環境を含めた文化財の保護をより一層進めるために、全国各地での古道歩きを推奨しました。

こうした国の取り組みに応じ、山梨県では山梨県教育委員会が中心となって関連資源の調査を進め『山梨県歴史の道調査報告書(第1集から第19集)』を取りまとめました(1985年—1991年刊)。その後、調査整備事業の内容も含めた『山梨県歴史の道ガイドブック』を編集し、調査の成果をより広く、分かりやすく公表しています(1998年刊)。このように、山梨県では、文化財調査を通した古道の学術的な整理と共に、県民・市民が広く歴史の道を歩き、体験することによる文化財の保護意識の醸成に取り組んできたところです。

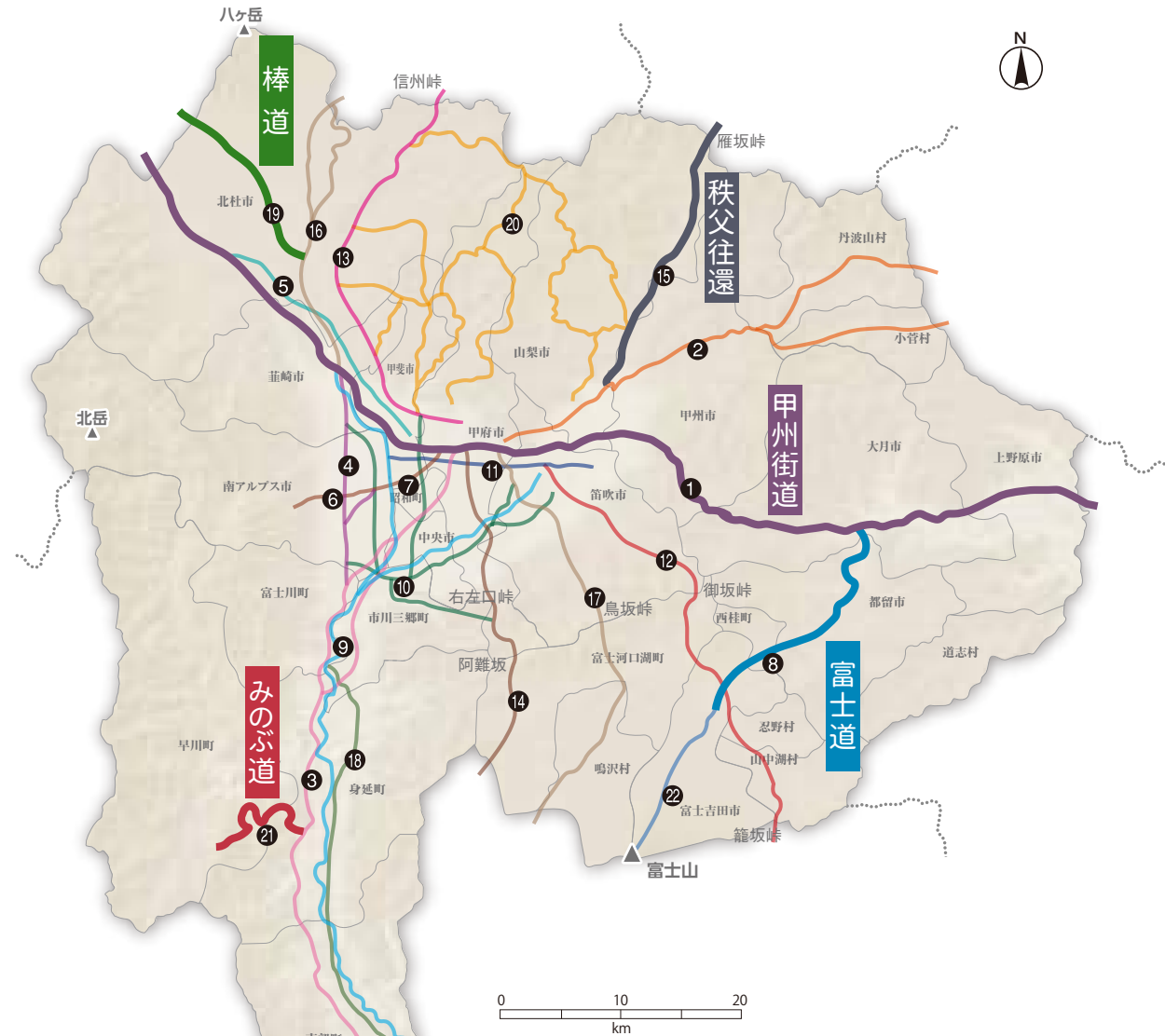
平成10年に山梨県が発行した『山梨県歴史の道ガイドブック』では山梨県内の歴史の道22道を整理しています。その中で、甲府盆地から周囲の山々へ延びる放射線状の交通網は「甲斐の九筋」といわれました。駿河に向かう河内路(右図の③)・中道往還(⑭)・若彦路(⑰)・鎌倉街道(御坂路、⑫)の4道。武蔵へは青梅街道(萩原口、②)・秩父往還(雁坂口、⑮)の2道。そして信濃につながる穂坂路(川上口、⑬)・棒道(大門峠口、⑱)・逸見路(諏訪口、⑤)の3道。これらが、江戸時代以前の古道の代表でした。

一方、山梨県をほぼ東西に貫き、今の道路交通における大動脈の基盤となった甲州街道は、江戸時代に東海道をはじめとする五街道の一つとして整備された道であり、徳川幕府の軍用道としての役割もあったといえます。また、江戸時代には富士山登拝を目的とする富士講や、身延詣の人々が山梨の道を盛んに往来したようです。山梨の海魚の食文化は、江戸時代の終わり頃に駿河湾で大量のマグロが獲れた時期があり、こうした海産物を馬の背や舟に積んで最短距離で甲府に運んでいたこと、そして甲府付近が海辺から内陸へ腐らせることなく生魚を運ぶ限界「魚尻線(うおじりせん)」に当たっていたことが理由だといわれています。

時代に応じた道ごとの役割があり、場所によって多様な事物が造られ、数々のエピソードが生まれたことでしょう。これら一つ一つの痕跡が点として残り、「もの」や「ひと」が移動して線となり、周囲にひろがってきました。点を訪ねることによって知ること見えることもあります。それを道という線、周辺を含めたまとまりの面、そして歴史という立体として見ることによって、さらに見えるものは深まるのではないのでしょうか。

やまなし歴史の道ルート

※歴史の道22道のルートを色別に表示しました。
※歴史の道には様々ルートがありますが、代表的なものとした。



山梨県教育委員会学術文化財課「山梨県歴史の道ガイドブック」(1998年)を基に作成

- | | | | |
|--------|------------|--------|----------|
| ① 甲州街道 | ⑦ 戸田街道 | ⑬ 穂坂路 | ⑱ 棒道 |
| ② 青梅街道 | ⑧ 富士道(谷村路) | ⑭ 中道往還 | ⑳ 御嶽道 |
| ③ 河内路 | ⑨ 富士川水運 | ⑮ 秩父往還 | ㉑ みのぶ道 |
| ④ 西郡路 | ⑩ 市川道 | ⑯ 佐久往還 | ㉒ 吉田口登山道 |
| ⑤ 逸見路 | ⑪ 御幸路 | ⑰ 若彦路 | |
| ⑥ 高尾街道 | ⑫ 鎌倉街道 | ⑱ 東河内路 | |
- 本事業のモデル道